で言うと，「リマ」の高さよりも「セ」の高さのほうがより高いことを意味させようとするものである。——このばあいだけ，いわば，三段観の見かたが導入されている。

□通常は，高低の二段観によっている。

簡潔的確の文アクセント表記を旨とした時，まずはこのような方法がとられてよかろうと考えるものである。

3　もし，音声と音韻とを峻別して言うならば，私の方言音研究は，音声を見つめようとするものである。しかしながら，音声の背後に，つねに音韻を観察しようとするものであることは，言うまでもない。この見地を，私は「方言音」の見地と名づける。(——以下，序説一　参照。)

4　本文中での参考文献の引用記載は，簡略法にしたがう。

目　次

緒　言……i
凡　例……iii
序説一　方言音記述の見地……1
A　現象に目を向ける方言音研究……1
B　主観的な音声判断による記述……1
C　実験音声学的方法への期待……3
序説二　方言音記述の体系……4
A　記述体系一案……4
B　方言音記述の小実践……4
C　本書での記述方針……5
序　章　昭和(→平成)日本語方言の世界と方言音……7
一　方言風土～音の世界～……7
二　人々の方言自覚……8
三　「ことば寄せ」に見られる方言音自覚……11
四　方言人の音声観念……14
第一章　特色音節の世界……16
第一節　「シェ」・「ジェ」……16
一　私の「シェ」体験……16
二　国の西半地方の「シェ」・「クヮ」……16
三　「シェ」の歴史……17
四　国立国語研究所『日本言語地図』……18
五　『瀬戸内海言語図巻』……19
六　諸地域に「シェ」・「ジェ」を見る……19

第一節　「サ」・「ザ」>「シャ」・「ジャ」
（「シャ」・「ジャ」>「サ」・「ザ」）……31
第二節　「クヮ」・「グヮ」……38
一　私の少年時の〔kwa〕・〔gwa〕……38
二　「クヮ」・「グヮ」の過去……39
三　国語調査委員会『音韻分布図』「27『カ』『クヮ』分布図」……40
四　『日本言語地図』……40
五　『瀬戸内海言語図巻』……41
六　諸地域に「クヮ」・「グヮ」を見る……42
第三節　「イェ」……49
一　私の少年時の〔je〕……49
二　諸地域に「イェ」を見る……50
第四節　カ行音の「キ」〔kçï〕・「ギ（キ゛）」〔gçï〕……55
一　カ行音内の特異音節……55
二　〔kçï〕・〔gçï〕の分布……56
三　「チ」への音訛……59
第五節　カ゛行音（カ゛行鼻濁音〈鼻音〉）……59
一　西の人と東の人と……59
二　今日でのカ゛行鼻濁音の分布……60
三　語中・語尾での「カ゛・キ゛・ク゛・ケ゛・コ゛」の成立……62
四　諸地域に語中・語尾の〔ŋ～〕を見る……66
1　北海道地方……66
2　奥羽地方……66
3　関東地方……69
4　中部地方……69
5　近畿地方……71
6　四国地方……73

7　中国地方……75
8　九州地方……76
9　南西諸島方面……77
第六節　タ行ダ行関係の特異音節……78
○　はじめに……78
一　琉球方面……79
二　九州地方……80
三　近畿地方……83
四　中国（全瀬戸内海域も）地方……85
五　四国地方……88
六　中部地方以東……92
七　むすび……94
第七節　ハ行音節の〔P～〕・〔F～〕……95
一　ハ行音「ハ・ホ・ヘ・フ・ヒ」の歴史……95
二　琉球地方の〔P～〕・〔F～〕……95
三　九州の〔P～〕・〔F～〕……97
四　山陰島根県地方の〔P～〕・〔F～〕……98
五　中部地方内の〔P～〕・〔F～〕……100
六　奥羽地方内の〔P～〕・〔F～〕……103
七　まとめ……107
第八節　中舌母音関係の音節……108
一　ズ（ヅ）ーズ（ヅ）ー弁……108
二　中舌母音音節の現存分布……108
1　琉球地方……108
2　九州地方……110
3　山陰地方……112
4　奥羽地方……116

5　北海道地方……122
6　北陸地方……124
7　関東地方……129
三　分布の歴史的考察……131
四　関連問題……132
第九節　鼻母音関係の音節……133
一　鼻母音……133
二　鼻母音の歴史……135
三　諸方言状況……137
1　琉球地方……137
2　九州地方……137
3　中国地方……142
4　四国地方……146
5　瀬戸内海大三島……150
6　近畿地方……158
7　中部地方……165
8　関東地方……173
9　奥羽地方……176
10　北海道地方……186
四　むすんで……186
第十節　福井県下の特異な音節群……188
第十一節　閉音節……190
第二章　音　変　化……193
第一節　音便特説……193
一　はじめに……193
二　イ音便（「出して＞出イて」など）……194
三　ウ音便……198

四　促音便……202
□　はじめに……202
1　東国系の促音便……203
2　近畿系の促音便……211
3　中国地方について……213
4　九州系の促音便……217
5　琉球地方のもの……224
□　むすび……225
第二節　連語上での連音節融合……226
□　はじめ……226
一　～テル：～トル・～ヨル……227
二　～ヨル……228
三　～トル・チョル……231
四　～テル・タル……236
第三節　語音（または連語音）上の連音節での〔ai〕連母音融合……240
□　はじめに……240
一　〔ai〕連母音融合……242
二　琉球地方……245
三　九州地方……246
四　中国地方……249
五　四国地方……257
六　近畿地方……258
七　中部地方……260
八　関東地方……266
九　奥羽地方……268
十　北海道地方……270
□　むすび……271

第四節　開音〔ɔ:〕の問題……272
一　語音（または連語音）上の連音節での〔au〕連母音融合……272
二　琉球地方……274
三　九州地方……274
四　中国地方……276
五　四国地方……282
六　近畿地方……283
七　中部地方……285
八　関東地方……300
九　奥羽地方……302
十　総　括……303
第五節　音節交替……305
一　音節考……305
二　母音音節とラ行音音節……306
1　九州南部と奥羽北部……307
2　九州……308
三　なにがしと「ン」との交替……314
1　「イ」→「ン」……314
2　「モ」→「ン」……316
3　「ミ」→「ン」……316
4　「ズ」→「ン」……317
5　「ト」→「ン」……317
6　「ク」「ギ」→「ン」……317
7　「ラ」→「ン」……318
8　「リ」→「ン」……318
9　「ル」→「ン」……319
10　「レ」→「ン」……320

11　「長音」（音節相当の「拍」）→「ン」……322
12　「促音」（音節相当の「拍」）→「ン」……324
13　補　説……324
四　なにがしと促音（拍）との交替……325
五　なにがしと長音（拍）との交替……326
1　「ル・レ」→長音……326
2　「イ・エ」→長音……327
六　母音音節と母音音節との交替……328
1　「イ」→「エ」……328
2　「イ」→「ユ」……330
七　〔CV〕音節と〔CV〕音節との交替……331
1　〔je〕>〔wa〕……331
2　「ス」→「ヒ」……331
3　「ヒ」→「ヤ」……333
4　「モ」→「ブ」……333
第六節　音節省略……333
第七節　音節添加……341
第八節　母音交替……353
第九節　母音省略・母音添加……359
第十節　子音交替……362
一　‘濁音化’……362
1　カ行音・タ行音の濁音化……362
2　奥羽地方カ行音の濁音化……362
2′　奥羽地方カ行音の弱濁音化……365
3　奥羽地方タ行音の濁音化……374
4　北海道地方の濁音化……377
5　関東地方の諸濁音化……379

6　中部地方……381
7　近畿・四国・中国の地方……385
8　九州地方の濁音化様相……387
9　清音読み・清音習慣……390
10　語頭濁音……393
11　おわりに……397
二　サ行子音⟷ハ行子音……398
1　〔s〕>〔h〕……398
2　〔ʃ〕⟷〔ç〕……405
三　ダ行子音⟷ラ行子音……413
1　〔d〕>〔ɾ〕……413
2　〔ɾ〕>〔d〕……417
四　ザ行子音⟷ダ行子音……419
1　〔z〕>〔d〕……419
2　〔d〕>〔z〕……420
五　マ行子音⟷バ行子音……421
1　〔m〕>〔b〕……421
2　〔b〕>〔m〕……423
六　バ行子音⟷ワ行子音……425
1　〔b〕>〔w〕……425
2　〔w〕>〔b〕……425
七　カ行子音→ハ行子音　カ行子音→タ行子音……428
八　ラ行子音⟷ヤ行子音……433
1　〔ɾ〕>〔j〕……433
2　〔j〕>〔ɾ〕……435
九　その他……436
a　〔s〕>〔j〕……436

b　〔ʒ〕>〔j〕……436
c　〔s〕>〔ʃ〕……437
d　「ユ」>「ズ」……438
e　〔j〕>〔ʃ〕……439
f　〔tʃ〕>〔ʃ〕……440
g　〔j〕>〔w〕……440
h　〔ɾj〕>〔ʒ〕……440
i　〔j〕>〔n〕……440
j　〔j〕>〔d〕……441
k　〔ɾ〕>〔g〕，〔tʃ〕……441
l　〔s〕>〔t〕……442
m　〔d〕⟷〔n〕……442
n　〔d〕>〔s〕……443
o　〔g〈ŋ〉〕⟷〔n〕，〔m〕……443
十　むすび……445
第十一節　子音省略……446
一　〔ɾ〕子音のすべり落ち……446
二　〔wa〕>〔a〕……458
三　〔k〕省略　〔g〕省略……459
四　〔n〕省略……460
五　〔ʃi〕>〔i〕　〔ʒi〕>〔i〕……461
六　その他……463
第十二節　子音添加……464
一　〔ɾ〕添加……464
二　〔b〕添加……466
三　〔j〕添加……467
四　その他……468

第三章　方言「文アクセント」……469
緒　説……469
「文アクセント」定義……469
その一　研究はじめのころ……470
その二　文アクセント論の方法……472
その三　分布図……474
その四　方言社会の文アクセント生活……475
特　節　琉球方言下の文アクセント……477
第一節　あと上げ調……480
◎　言うところの「あと上げ調」について……480
一　九州南部〈⟶その他の九州域内〉と奥羽北部……482
二　九州の前述以外でのあと上げ調……490
1　長崎県西彼杵半島に見られるもの……490
2　抬頭後起のあと上げ調（┐└──┘→。）……492
三　中国地方のあと上げ調……493
四　四国について……502
五　近畿について……504
六　中部地方……508
1　北陸道のあと上げ調……508
2　ゆすり音調……511
3　東山東海がわ……533
七　関東域でのあと上げ調……535
八　奥羽内の（既述以外の地での）あと上げ調……540
九　北海道地方……546
十　むすび……547
第二節　あと下げ調……548
◎　特性「あと下げ」……548

一　山口県地方→中国地方……550
二　四国地方……560
三　九州地方……562
四　近畿地方……565
五　中部地方……565
六　関東地方……570
七　奥羽地方……570
八　おわりに……571
第三節　高平調（高音連続）……572
◎　高音の連続……572
一　九州地方……573
二　中国地方……578
三　四国地方……580
四　近畿地方……584
五　中部地方……586
六　関東地方……588
七　奥羽地方……590
八　おわりに……592
第四節　曲揚調……592
◎　やわらかぶりに上げ下げしていく音調……592
一　四国地方……593
二　近畿地方……597
第五節　余　論……603
第四章　語アクセント……607
第一節　語アクセント研究の新展……607
第二節　研究小テーマ回顧……608
第三節　語アクセント聴取……610

第四節　平板化……611
第五節　語アクセント史観……612
第五章　方言会話音声……613
第一節　会話での抑揚対応……613
第二節　会話音声中のなまり……616
第三節　会話での語アクセント地盤……617
あとがき……620
その一……620
その二……621

序説一　方言音記述の見地

A　現象に目を向ける方言音研究

ほかならぬ方言の研究である。私は，方言音研究も，ひたすら，現象音に目を向けるべきものだと考えている。もしも，方言音研究が，はなはだしく音韻論的になっていったら，これは方言研究の面目を失うであろう。方言は，言語の，もっとも峻厳な現実態を言うものにほかならないからである。

さりながら，方言の音現象の背後に，音韻の定在することもまた明らかである。人間言語のコミュニケーションの根底には，音現象に関しても，音韻と言える核的なもの，あるいは現実思考の基体とも言えるものが予定されなくてはならない。(現実態の概念は，すでに可能態の概念を予定したものである。)

それにしても，ここに重要なのは，現実思考の核的なものと，現実態そのものとの内外一体ということである。——音声と音韻との相即一如ということである。音韻論は，みだりに独行するものであってはならない。音声論もまた，音韻論を忘れたものであってはならない。

このような両者の緊密な一体性の認められるところに，「方言音」との，一種の融合の概念が成りたつ。方言音との考えかたは，一面，常識的であって，他面，合理的である。

B　主観的な音声判断による記述

私が直接に方言音を調査したと言っても，それは私個人の耳による主観的な判断にほかならない。「山」(やま)の高低アクセントを私が聴取して，これを「ヤ$\overline{マ}$」と解したといっても，これは私個人の耳による，いわば主観の判断にほかならない。このようなことが，私の方言音研究の出発点であることを，まず，おことわりしておきたい。

第一章　特色音節の世界

第一節　「シェ」・「ジェ」

一　私の「シェ」体験

昭和三～七年，私の広島での学生生活のころのことである。寮には，南の沖縄県から北の北海道までの人々が居住していた。中の多数は関西地方・九州地方の人であったろう。

近畿以西の学生間で，地方ことばが問題になる時は，とかく「シェ」・「クヮ」の音がとりさたされた。今，想起するのに，地方語・方言といえば，早くも「シェ」・「クヮ」の音の特色が指摘されたようである。かく言う私も，兵庫県の人から，“おまえは「シェ」と言う。”と指摘された。おどろいた私は，“そんなことはない。”と，しばらくのあいだは抗弁をつづけたのだったが，ようやくにして気づいてみると，私は，ア行の「エ」も〔je〕と言っており，「セ」もまさに「シェ」と言っていた。

当時，近畿以西では，〔ʃe〕・〔kwa〕が，方言意識にすぐ登場してくる要素であったことを，今かえりみて，重要な気づきであったと考える。

二　国の西半地方の「シェ」・「クヮ」

方言を研究する身となって，しだいに踏査の地域をひろげ，近畿以西の地方をかなり知るようになっておどろいたのは，やはり，この地方で人々が，自他の方言を問題にして，早くも「シェ」や「クヮ」を問題にしがちであったことである。方言といえば「シェ」・「クヮ」，といったような民間通念が，国の西半地方にはありきたったかと思う。

私は，方言音の世界に特色音節を見るにあたって，まず以上のような事態を重視したい。

「シェ」に対する「ジェ」，「クヮ」に対する「グヮ」は，広島の学生寮でとりさたされることがすくなかったし，また，近畿以西の民間でも，意識されることがわりあいすくなかったようである。これらが問題にならなかったのにはわけがあろう。一つには，出現の頻度の低いことが考えられる。（清音に対する濁音の，出現頻度一般については，推計学的な処理がほしいものである。）

三　「シェ」の歴史

広く日本の諸方言を見わたすと，「シェ」の存在する所には「クヮ」が存在しがちである。両者の相関的な存在が見られがちである。なお，「シェ」や「クヮ」の見られる所には，いわゆるガ行鼻音の見られないことが多い。この相関的事実も注目にあたいする。――おそらくは〔ʃe〕・〔kwa〕の存立がより古くて，ガ行鼻音の成立はより新しいものであったため，分布上のこのようなずれが見られるのであろう。

橋本進吉博士によれば，「奈良朝及び以前」とされる時代では，

シセジゼは si se zi ze ではなく ʃi ʃe ʒi ʒe であつたかも知れず

或はサシスセソザジズゼゾがすべて ʃa ʃi ʃu ʃe ʃo ʒa ʒi ʒu ʒe ʒo

であつたかも知れない（但し方言には，なほ他の音があつたかも知れない）。

という。（『日本文学大辞典』II　「国語」の項の「国語の沿革」の条　p.79　新潮社　昭和８年４月）長期の歴史的事象〔ʃe〕・〔ʒe〕が，今日も，方言生活に密着した，はなはだしく方言的な事象になっている。（私は，今日の「シェ」や「クヮ」を，昭和〈→平成〉日本語方言の世界〈という歴史的世界〉にとっての，象徴的な存在とも考えている。）

以下に，現代方言生活での「シェ」・「ジェ」存立の実相を見ていこう。

後記

明治末の国語調査委員会の音韻分布図に〔ʃe〕・〔ʒe〕音に関するものがない